

古志青年部年間作品集  
第五号

## 目次

蛇笏の秋	16
初蝶	14
かげろふ	12
朝顔	10
風	8
幻	6
■自選十二句	
イーブン美奈子	6
石塚直子	8
伊藤 空	10
岡崎陽市	12
金澤諒和	14
関根千方	16
〈俳句作品〉	5

花	高角みつこ	18
こななにも世は	竹下米花	20
夜神楽	丹野麻衣子	22
新暦	辻 奈央子	24
きぼう	内藤 廉	26
侍	西村麒麟	28
蟻の声	三玉一郎	30
春灯	吉富 緑	32
落窪	渡辺竜樹	34

■青年部入会案内

〈文章〉

■講評

■青年部合宿句会報告

■青年部年間活動記録

神蛇 広

石塚直子

36

37

38

49

53

俳句作品

幻

イーブン美奈子

大綿は夢の国より降つて来し  
青写真大きな夢を写すべく  
囀の高さまでゆくエレベータ  
バンコクといふ大いなる蜃気楼  
瀬の祭りし魚と出されけり

憚らず鳥が恋してゐる地球  
進化論嘘かも知れず蝦蛄を食ふ  
雲の峰押して押されてこの形  
過去ひとつ青き氷河に置いてきし  
灼熱の地べたを這つてゆく我ら  
夏料理てふせせらぎのやうなもの  
天高きこの朝にある大河かな

■一九七六年生まれ。神奈川県出身、タイ国バンコク在住。古志同人。ホームページ部部長。海外日系人協会の第四回みなとみらい文芸祭にて海外日系人協会理事賞、第八回、第九回同文芸祭にて文芸祭賞受賞。

## 風

石塚直子

春着着て女の一生楽しみめり  
学生といふ大役を卒業す  
ひと畝は肥料になりし菜花畑  
しみつたれた夢も希望も虫干しす  
鉄棒で蹴る蒼穹の大暑かな



旅に出ん今宵の月を供として  
薄売そこだけ風の起こりけり  
新藁で産まれ育ちし遊ぶ猫  
しぐるるや行商の荷の守り札  
寒がりの母の匂ひのするマフラ  
新しき畳の上を歌留多とぶ  
水戸つぽの気概で生きて納豆汁

■一九八七年生まれ。茨城県出身、  
東京都在住。古志同人。古志青年  
部部长。

## 朝顔

伊藤 空

真つ直ぐに夢をみている雛かな

少年の血より生まれしヒヤシンス

朝日抱き夕日を背負ひ蜘蛛一日

背中割れ静かな白い蝉出でぬ

昼顔に風の行方を尋ねけり

星月夜自由となりて旅立ちぬ  
月光に保健所の犬鳴きにけり  
姥捨てて眩しき月の光かな  
恋人と空に鰯の群れを見る  
月落ちて遠い夜明けを浜で待つ  
朝顔の双葉が開く澄んだ空  
春を待つガラスの星のこどもたち

■一九六八年生まれ。神奈川県横浜  
市出身、小四から中一にかけて  
モスクワで過ごす。静岡県浜松市  
在住。

かげろふ

岡崎陽市

梅いちりん伊予一国のごとくあり  
故里を出てかげろふとなりけり  
雪のこる嶺かがやかに信濃かな  
春遠くながれてゆけり千曲川  
ふぶくなか見あぐる人も桜かな

はるかなる隠岐を見てたつ日傘かな  
鳴るなかにしんとをりけり風鈴売  
ゆらゆらと燃えてゐる八月の街  
すれちがふしろきひかりの秋遍路  
そのうへにけさの月ある京都かな  
かの人のこころまぶしむ賀状かな  
正月凧ひつぱるたびに揚がりけり

■一九七二年生まれ。愛媛県出身、在住。古志同人。二〇一〇年、古志新人賞。二〇一四年、「一億人の俳句入門」ネット投句年間賞。

初蝶

金澤諒和

春塵の街新しき肩ばかり  
教室に行けず目高の鉢つつく  
道をしへひたすら跳んでみせにけり  
水を打つ水をもつとも綺麗にし  
断捨離をして大西日残りけり

貧しきは空を見ぬこと冬の虹  
里神楽斬られつつ舞ふ大蛇をろちかな  
薇を解けば星の匂ひかな  
初蝶に鉄壁の天ありにけり  
天領や子の手を離かるる流し雛  
朧夜やかくも戦後の長き国  
抱きしめて抱きしめられて卒業す

■一九七一年神奈川県川崎市生まれ。二歳より大分県大分市在住。第十七回隠岐後鳥羽院短歌大賞大賞（短歌）。第十八回毎日俳句大賞入選。

## 蛇笏の秋

関根千方

四つ折の時空ひろげて絵双六  
みな春の泥の化身と思ふべし  
人生を裏に表に海苔炙る  
イエズスの大智の中に絵踏かな  
山古志の雪の色なる夏の鯉



この星の水吸ひあげて蓮ひらく

氷河いま荒ぶる水とならんとす

端居して我もそろそろ古きもの

どつかりと蛇笏の秋の立ちにけり

尻上げて秋の蜥蜴を通しけり

冬籠る我一匹の貉かな

去年今年中央線で貫いて

■一九七〇年生まれ。東京都出身。在住。古志同人。古志東京支部長兼ホームページ部部长。二〇一〇年古志新人賞受賞。二〇一五年第十回館山賞俳句賞受賞。

## 花

花散らし花に転がる雀かな

そよ風の吹いて寄せたる白魚かな

白シャツの腕まつすぐに飛車香車

比叡よりつづく水路や濃紫陽花

残り香のすいと風鈴鳴らしゆく

高角みつこ

久々のこの世の雨ぞ茄子の馬

秋澄むや舟にひらりと弁財天

釣糸を垂れては深き秋の底

セーターはちぢむし恋はくだけるし

鯨捕るほかは用なき男かな

大阪の空あをあと初戒

どつしりと元福娘花の春

■一九七三年生まれ。兵庫県出身、大阪府在住。古志同人。古志校正部部員。NPO法人季語と歳時記の会主催第一回「恋の俳句大賞」受賞。

こんなにも世は

竹下米花

柿紅葉こんなにも世はうつくしく

月蝕の静かの海のさやけき夜

しだり尾のながながし夜の紹興酒

鰯雲みんな帰つてから泣こう

爽籟や鳥獣戯面の帯めて

梨ひとつ西方浄土に持つてゆけ

あの人用この人用と大根干す

珈琲屋なき中東の雪遊

衣紋掛部屋に差し込む春の色

たのもしき尻むけてゐるハンモック

ハンモック句帖地上に置いて来し

今生といふ大いなる夏休

■一九七四年生まれ。神奈川県出身、京都府丹後地方在住。古志同人。

## 夜神楽

丹野麻衣子

雪が舞ふ荒ぶる神を迎ふべく

月上げてけふは雪降る火山灰が降る

凍つる夜をものともせず神楽歌

勇魚すむ海をとなりに春を待つ

武道館ゆるがせてけふ卒業歌

眠るのほ筍掘りに飽きし人  
藻を刈つてそのまま草も刈る勢  
最澄の産湯の井戸の晒しどき  
秋の日を濃く搗き込んでかぐや餅  
弁天の裳裾すなはち紅葉鮎  
風立ちぬひとたび鱸口あけば  
這ひ這ひにはや鯊釣りを仕込まんと

■一九七四年生まれ。石川県出身。神奈川県に育つ。東京都在住。古志自選同人。古志同人会副会長。二〇〇七年第三回飴山賞俳句賞受賞。

## 新暦

日当たりのよき場所選み新暦  
冴え返る今年限りの村もまた  
春の月ちよいとつまんで持つてこよ  
道迷ふこともうれしや花の道  
夏蝶と一本の道ゆづりあふ

辻  
奈央子



思案には向かぬものなり籐寢椅子  
ちつぽけな命も端居してをりぬ  
たいくつといふ日がなくて星月夜  
虫の音に包まれきつて町眠る  
この道と決めてますぐに秋日和  
なにもかもやりかけのまま冬に入る  
たちまちにいとほしくなる古暦

■一九七七年生まれ。神奈川県横浜  
市出身、在住。古志同人。古志  
編集長。

きぼう

内藤 廉

春告げる列車の音や新駅舎  
雀の子次はどの子が顔上げる  
何処より流れてきたり蜘蛛の糸  
まつすぐに蓬萊橋や柳絮舞ふ  
敗戦忌父の眠りし島に立ち

彼方より芋煮の匂ひ広瀬川  
わらわらと土より出でて落花生  
みつ蜂の飛びゆく先や枇杷の花  
麴室したたる汗もそのままに  
紅葉は海よりきたり厚岸草  
初点前ぴしりと決まるの字かな  
きぼうよりながめる月は大きいか

■一九八一年生まれ。宮城県出身、  
静岡県在住。

侍

勢ひがまづは大切飾海老

侍の格好でする鏡割

鶯替へて鶯を愛しく思ひけり

枝揺れて冬の雀がゐたりけり

鳥の巢鳥がとんと収まりぬ

西村麒麟

そこに居るごとく着物や月おぼろ

太陽の大きな土佐や遍路笠

夏蝶と遊ぶや妻とその母と

禁酒して詰まらぬ人として端居

滝茶屋に座つてゐたる女の子

七夕や鯨の海がきらきらと

朝鮮の白き山河や冷し酒

■一九八三年生まれ。大阪府出身、  
広島県に育つ。神奈川県在住。第  
一回石田波郷俳句新人賞受賞。第  
四回芝不器男俳句新人賞大石悦子  
奨励賞受賞。第五回田中裕明賞受  
賞。

蟻の聲

三玉一郎

白梅や咲き満ちてまだ満ち足らぬ  
その上の艫の暮れてゆく花筏  
噴水は怒つたやうにとまりけり  
蟻の聲だけとなりたる暑さかな  
近づいて大雪溪でありにけり

虫干や一畳で足る母のもの

花合歓と背中合せに眠りけり

鉦叩別れの鉦を叩きけり

秋蝶のいよいよどこへでもゆける

遠山や朝をさまよふ虫の声

たつぷりと眠るつもりか雨の山

雪深き方へと続く雪の道

■一九六五年生まれ。宮城県出身、  
神奈川県在住。

春灯

吉富  
緑

御降りの雪に白地図ゆくごとし  
ひと粒の黄沙になりて旅の果つ  
春灯が地上にひとつ帰国せむ  
台北の春炉に我も過客かな  
外野手の後ろ広びろうまごやし



得点のたびに日傘も揺るるなり

大空を雲は自在やハンモック

あぢさゝるは身投げむばかり瀬音かな

広重の鬘も濡れしか大夕立

初秋の山また山の近江かな

凧と転がり込むや映画館

干柿と物干し竿を分かち合ふ

■一九六八年生まれ。長崎県出身、  
福岡県在住。

落窪

渡辺竜樹

加賀

雪吊のゆるみて春となりゐたり

問答の山中に来て永き日を

手づからに摘んでこの春囃すなり

伊勢二見浦

鶯やすこしはなれて夫婦岩

ときにかげる海も春愁抱くらん

わたつみの春愁の角<sup>つ</sup>岩二つ

吉野

花にねて夢の落窪たとほる

身に憑きし花を鎮める茶粥かな

大の字になりてこの世を簞

炎天やひろき裏もつ東大寺

初蟬やかなしき声を夢の中

空席の目立つ夜学の灯かな

■一九七六年生まれ。愛知県出身、在住。古志名古屋支部長。二〇一〇年第五回飴山實俳句賞受賞。二〇一二年第五十八回角川俳句賞予選通過。二〇一五年第六十一回角川俳句賞予選通過。

## 入会案内

- 「古志」の年会費は一万二〇〇〇円です。
- 二十五歳未満（その年の一月一日現在）の場合、年会費は三〇〇〇円です。
- 会費の納入は郵便振替で振り込んでください。
- 振込み人欄に、氏名・併号（ふりがな）、生年・月、男女、郵便番号、住所、電話番号を明記ください。
- 郵便振替口座の番号は、次の通りです。  
古志社 0010007512480
- 古志青年部に参加できるのは五十歳未満の古志会員です。
- 古志青年部ブログのURLは、  
[http://blog.livedoor.jp/koshi\\_seinembu/](http://blog.livedoor.jp/koshi_seinembu/) だよ。

# 文章

講評

『古志青年部年間作品集第五号』を読んで

神蛇広（「古志」同人）

幻

イーブン美奈子

バンコクといふ大いなる蜃気楼

進化論嘘かも知れず蝦蛄を食ふ

夏料理てふせせらぎのやうなもの

一句目、ひしめき合う建物も人々の喧噪も、すべて夢幻のごとくに感じた。「バンコク」という街のエネルギ―が伝わる。二句目、蝦蛄は少々グロテスクな姿かもしれないが、美味い。特に子持ちの蝦蛄は絶品。掲句は進化論と蝦蛄とをあまり意味付けせずに、そのまま味わった方が面白い。ことわり理がふいに嘘っぽく思えた。蝦蛄を食った。この落差が良い。三句目、並ぶ料理から、涼しげな水音を聞きとる。夏の暑さを忘れるひととき。

風

石塚 直子

しぐるるや行商の荷の守り札

寒がりの母の匂ひのするマフラー

新しき畳の上を歌留多とぶ

一句目、行商の大荷物に守り札が貼られているのを見つけた。「時雨」が荷物の重さを感じさせる。二句目、借り物なのか貰ったものなのか、マフラーから母の匂いがする。「寒がりの」とひとつ足すことで、母に対する愛情の深さが伝わってくる。三句目、歌留多が飛ぶほどなので競技会の一コマか。芳しい畳の香に包まれた会場に、ぴんとした空気が張り詰めている。競技者の息遣いまで聞こえるようだ。

朝顔

伊藤 空

背中割れ静かな白い蟬出でぬ

朝顔の双葉が開く澄んだ空

春を待つガラスの星のこどもたち

一句目、長年暮らした地中から這い出し、ゆつくりと蟬は殻からその姿を現す。「静かに」ではなく、

「静かな」。生まれたての蟬の白さが際立つ。二句目、小さな双葉と空を同時に見ることは人間の視点では無理だが、虫の視点とすればよし。不思議で爽やかな景色が見えた。三句目、ガラスの星とは地球のことか。いつ砕けてもおおしくないこの星に、命そのもののような子供達。共にささやかな春の訪れを待っている。

かげろふ

岡崎陽市

故里を出てかげろふとなりにつけり

春遠くながれてゆけり千曲川

正月凧ひつばるたびに揚がりけり

一句目、「かげろふ」となったのは、自分だけではない。故里を出た者すべてが「かげろふ」と捉えると面白い。二句目、春が流れて行くようにも思える。どの国の川でも良さそうだが、千曲川はよく合っている。三句目、凧は引つ張れば揚がる。当たり前のことを当たり前に表現している。しかし、この句にある明るさは、ひつばる「たび」に高く揚がつてゆく姿からか。新年の空の清々しさがある。

初蝶

金澤 諒和



教室に行けず目高の鉢つつく

断捨離をして大西日残りけり

里神楽斬られつつ舞ふ大蛇をうちかな

抱きしめて抱きしめられて卒業す

一句目、教室には行けないが、学校には来ているのか。目高と自分だけの世界。二句目、「断」つて「捨」てた部屋を西日が照らしている。さっぱりとした気持ちと少しの後悔と。三句目、中七で動きが出た。小さな村の賑やかなひととき。三句目、「抱きあつて」でなく「抱きしめて抱きしめられて」いる。お互いの想いが溢れている。

蛇笏の秋

関根 千方

みな春の泥の化身と思ふべし

この星の水吸ひあげて蓮ひらく

どつかりと蛇笏の秋の立ちにけり

尻上げて秋の蜥蜴を通しけり

一句目、天沼矛の滴からすべて始まった。春は万物創生の季節でもあるか。二句目、花はすべて

水を吸い上げて咲くものだが、「蓮」としたことでも水の清らかさが出た。三句目、「すすき」、「秋風鈴」、「秋蛩」、蛇笏の句のごとき秋が眼前にそびえているのだ。四句目、動きが鈍くなった秋の蜥蜴だから尻を上げて通してやった。おかしみのある句。

花

高角みつこ

比叡よりつづく水路や濃紫陽花

セーターはちぢむし恋はくだけるし

鯨捕るほかは用なき男かな

どつしりと元福娘花の春

一句目、三成ゆかりの坂本の町か。流れ下る水と紫陽花。美しい風景。二句目、生きていれば、そんな時もあるよね。それを口語体で言い止めた。三句目、言い切られたこの男はどんな男なのか。番場蛮の父なのか。想像がふくらむ。四句目、昔麗しき福娘、それは今でも変わらない。少々どつしりとしたが。「花の春」が明るさとめでたさを連れてきた。

こんなにも世は

竹下米花

あの人用この人用と大根干す

たのもしき尻むけてゐるハンモック  
今生といふ大いなる夏休

一句目、食べてもらう人のことを考えながら、次々と大根を干してゆく。その心持が嬉しい。大根という素材がその気持ちを引き立てている。二句目、大きなお尻をこちらに向けて寝ている。ハンモックの上でゆらゆらと揺れているその様は、涼しげでもあり、おかしくもあり。三句目、仏教では今生は穢土であり、浄土へ往生するための修行の場。これを「夏休」と言っている。さて、どんな夏休みを過ごそうか。

夜神楽

丹野麻衣子

勇魚すむ海をとなりに春を待つ  
眠るのは筍掘りに飽きし人  
弁天の裳裾すなはち紅葉鮒  
風立ちぬひとたび鱸口あけば

一句目、鯨の棲む大海と自分、厳しい冬の寒さと春を待つ心の温かさの対比。二句目、「飽きし」との措辞を見つけたことがこの句の手柄。竹林が匂い立つ明るさ。三句目、舞い踊る弁天様から美

しき紅葉鮒が生まれて出てくるよう。秋ならではの華やかさ。四句目、取り合わせの意外性。鱸の大口なら本当にあるかも、と思える豪快な句。

新曆

辻奈央子

日当たりのよき場所選み新曆

冴え返る今年限りの村もまた

春の月ちよいとつまんで持つてこよ

一句目、真新しい曆を吊るした場所だけ、一足早く明るい正月が訪れた。気持ちの良い句。二句目、来年にはもう無くなっているであろう村に寒さが戻る。村自体が生き物のように春の寒さを感じているようだ。三句目、花魁が禿に戯れを投げかけているよう。俳諧味があり艶やかな句。これが佐保姫の台詞ならば、本当に月が持ち去られてしまい、そんな夜を朧夜と云うのかも知れない、と想像するもの楽しい。

きぼう

内藤廉

わらわらと土より出でて落花生

みつ蜂の飛びゆく先や枇杷の花

きぼうよりながめる月は大きいか

一句目、まるで自らが望んでいるように、わらわらと土の中から落花生が現れた。面白がる作者もまた一服の戯画。二句目、冬でも暖かい日には蜜蜂は飛ぶ。目立たない「枇杷の花」に穏やかな冬の一日を感じた。三句目、国際宇宙ステーションにある日本実験棟「きぼう」。そこからの月はどう見えるのだろうか。「そこから月はどう見えますか。大きいですか」。地上から「きぼう」を眺めながら問いかけている。

侍

西村 麒麟

勢ひがまづは大切飾海老

枝揺れて冬の雀がゐたりけり

夏蝶と遊ぶや妻とその母と

禁酒して詰まらぬ人として端居

朝鮮の白き山河や冷し酒

一句目、「大事や」でなく「大切」。この加減が良い。二句目、雀がいてことで寂寥感が深まった。三句目の「その母」、四句目の「端居」の意外性。この外し加減が面白い。五句目、もちろん、こ

の山河は雪景色ではない。立ち姿の美しい句。

蟻の声

三玉一郎

白梅や咲き満ちてまだ満ち足らぬ

近づいて大雪溪でありにけり

雪深き方へと続く雪の道

一句目、白梅の清冽さがこの感情を呼び起こすのであろう。桜であれば虚子の「咲き満ちてこぼるる花もなかりけり」となる。二句目、遠くからでは小さく見える残雪が、思いのほか大きかった。素直な驚きをさらりと切り取った。三句目、雪深い山に向かつて、まっすぐに道が続いている。かすかに見えている雪の道が、白の世界に飲み込まれるように消えて行く。しかし、その先にも確かに人の営みがあるのだ。

春灯

吉富緑

外野手の後ろろ広びろうまごやし

得点のたびに日傘も揺るるなり

大空を雲は自在やハンモック

一句目、河川敷のグラウンドであろうか、草野球をしている。広がる空と心地良い風がここにある。のんびりとした時間を作者と共に過ごしているように感じた。二句目も同じ場面か。こちらは視点を変えて観客の方を見ている。歓声が聞こえてくるようよう。三句目、大空に雲が浮かんでいる。自在なのは雲の方ではない。ハンモックに揺られながら、空を眺めている作者の心が自在なのだ。

落窪

渡辺 竜樹

加賀  
雪吊のゆるみて春となりるたり

吉野  
花にねて夢の落窪たもとほる

身に憑きし花を鎮める茶粥かな

大の字になりてこの世を簞

炎天やひろき裏もつ東大寺

一句目、緩んだ綱に春を感じた。二句目、夢と現実のはざまが花の吉野にはあるのか。三句目、花の後、容易に鎮まらぬ心の昂り。四句目、この世という時を全身で味わっている。五句目、何も言わないことで、かえって強烈な夏の日差しを感じた。

井上靖の詩集「北国」あとがきに次のような一節がある。

私はこんど改めてノートを読み返してみても、自分の作品が詩といふより、詩を逃げないよ  
うに閉ぢ込めてある小さい箱のやうな気がした。——中略——併し、かうしたものを書いてお  
いたお蔭で、一遍づつ読んで行くと、曾て私に訪れた詩の一つ一つが——ふと私の心にひらめいた  
影のやうなものや、私が自分の外界の事象の中に発見した小さな秘密の意味が、どこへも逃げ  
出さないで、言葉の漆喰塗りの箱の中の隅の方に、昔のままで閉ぢ込められてあるのを感じた。  
さういう意味では、私にとつては、これらの文章は、詩といふより、非常に便利調法な詩  
の保存器であり、多少面倒臭い操作を施した詩の覚え書きである。

詩歌に限らず心揺さぶる創作物には、この「詩」が入っているのだろう。俳句という「箱」は  
十七音しかない。「箱」を作るだけで精一杯、「箱」にならないことも多い。そして、この言葉の「箱」  
は、中身とほんの少しずれていただけで、たちまちつまらない句、只事俳句となってしまう。難し  
いが、そこが面白い。

■一九六五年、岡山県生まれ。岡山市在住。一九九四年より「古志」に参加。



## 報告

### 青年部合宿句会報告（八月二十二日、二十三日）

石塚直子

合宿句会は古志青年部恒例の行事である。今年は、芭蕉ゆかりの地・滋賀県菅浦にて二泊二日で行った。

参加者は、大谷弘至主宰をはじめ、七名の青年部

員（高角みつこさん・丹野麻衣子さん・前田茉莉子さん・三玉一郎さん・吉富緑さん・渡辺竜樹さん・石塚）、ゲストに古志の木下洋子さん・齋藤嘉子さんの二名をお迎えし、総勢十名。

一日目。宿泊先（つづらお荘）の最寄駅に集合。

初めて顔を合わす方、約一年ぶりに顔を合わせる方などがおり、着いて早々みな話は尽きない。バスに

乗り、宿泊先へ。ホテルへ荷物を預けると、ホテル近辺や琵琶湖など、夕食の時間まで各自思い思いの場所へ吟行をしに出かけた。

吟行から戻り、皆で地元食材を中心とした夕食に舌鼓を打った後、二句座行う。

第一句座は吟行句。五句出句五句選。

第二句座は席題（野分、夜学、玉蜀黍）。三句出句三句選。

信心の鮎もうなぎもすびにけり 弘至

乗り換えるたびに蜻蛉の増ゆる空 一郎

鯛の森の奥までお参りに

麻衣子

釣糸を垂れてはふかし秋の底

みつこ

村ひとつ大緑陰のその下に

嘉子

初秋の山また山の近江かな

緑

かなかなをもの始の合図とす

直子

野分来る鳶を大きく傾けて

一郎

消しゴム屑まるまるたる夜学かな

竜樹

流木を拾ひゆかんと野分あと

洋子

第一句座の「乗り換える…」「初秋の…」「かなかなを…」の三句は句会参加者や土地(菅浦や琵琶湖)への挨拶句。

第二句座後、半歌仙を巻くことに。歌仙未経験者も多かったが、大谷主宰の丁寧なご指導のもと、みなであれやこれやと言ひ合ひ、わいわい盛り上がりながら、どんどん句を出してゆく…。あつという間

に時間が過ぎ、続きは翌日へ持ち越しに。

一日目はこれにて終了。二句座・半歌仙と連続し、みなすべてを出し切ったよう。句座の疲れを琵琶湖を臨む露天風呂で癒し、就寝。

二日目。午前中は竹生島で吟行。竹生島へは小船を出してもらい島へ。時々浴びる水しぶきが心地よく爽快であった。

竹生島は琵琶湖に浮かぶ周囲2kmの小さな島で、戦国時代には数々の武将からの信仰も集めたこともあり、島には安土桃山時代の国宝や重要文化財も数多く残されている。我々は竹生島一の絶景、竜神拝所の「かわらけ(土器)投げ」に挑戦をするなどしながら、島で吟行を行った。

帰り際、とある土産物屋で長谷川權先生の句(「半椀は茶漬としたり蜆飯」)を見つける。蜆飯は今回

食せず残念。代わりに、船着き場からホテルまでの間にあった店の「かぐや餅」という草餅を食す（ひとつひとつ丁寧につくられ絶品であった！）。

ホテルに戻り昼食。その後二句座行う。

第一句座は、吟行句。五句出句五句選。

第二句座は席題（秋の日・鶏頭・紅葉鮒）。三句出句三句選。

秋の日を濃く搗き込んでかぐや餅 麻衣子

弁天の裳裾すなわち紅葉鮒 麻衣子

石垣に守られし村鶏頭花 一郎

秋日濃たゆたふ鴨の背中にも 茉莉子

第二句座は席題であったが、この二日間の吟行が生きた句が並んだ。

二句座後、前日の半歌仙の続きを行う。満卷したものが次ページの「半歌仙」「近江」の巻」である。

皆で協力して巻き上げたこともあり、合宿のよき思い出となった。

ばさばさと檜皮重ねて露けしや 竜樹  
 色変へぬ松は龍神さながらに 嘉子  
 島守や湖を背にして松手入 竜樹  
 秋澄むや舟にひらりと弁財天 みつこ  
 水神に寄り道をせむあなまどひ 茉莉子  
 龍神が吹き起こす風秋の風 麻衣子  
 新涼の風吹き抜ける舟廊下 洋子  
 さきがけて鮒のもみづる国ならん 弘至

今年は計四句座に加え、半歌仙を巻くという大変充実した句会となった。帰る頃にはみんなクタクタかと思いきや、帰りのバスの中ではこの二日間の思い出話に花が咲いた。古志青年部の元気は、これからも皆の句に生きてくるはずだ。

半歌仙「近江」の巻

大谷弘至捌

連衆

石塚直子・木下洋子・齋藤嘉子・高角みつこ・丹野麻衣子・  
前田茉莉子・三玉一郎・吉富緑・渡辺竜樹

初秋の山また山の近江かな

緑

やんやとたたふ真ん丸の月

茉莉子

埋めに埋め核廃棄物だらけにて

嘉子

露寒の垂乳根いかにおはすらん

嘉子

社会鍋から銭を抜きとる

一郎

黒帯締めて明日は大会

みつこ

月のせて大観覧車凍ててをり

緑

長々と迎への車並びあて

麻衣子

朝までかけて大手術果つ

直子

間諜さぐる避暑の屋敷よ

竜樹

女へと生まれ変はりてスキップを

みつこ

今はもう筆筒の中にサングラス

直子

磯巾着にすれすれの波

竜樹

小さき眼はチャームポイント

茉莉子

源平の夢のかけらか散る花は

洋子

一チーム分の数だけ子が欲しい

一郎

酒樽あけて春を惜しまん

麻衣子

かのリア王がさまよふ荒野

洋子

二〇一五年 古志青年部年間活動記録

■四月 第一回（二〇一五春） ネット句会

■六月 第二回（二〇一五春） ネット句会

■八月二十二日（土）、二十三日（日）合宿句会（於：  
滋賀県管浦）

■九月 第三回（二〇一五秋） ネット句会

■十二月 第四回（二〇一五冬） ネット句会

※ネット句会はいずれも席題。三句出句三句選。

□「古志青年部ブログ」連載

※「タイ便り」 イーブン美奈子さん

※「大阪便り」 高角みつこさん

※「熊本便り」 前田茉莉子さん

編集 石塚直子  
デザイン 関根千方

## 古志青年部年間作品集 第5号

2016年7月1日 発行

発行者 古志青年部  
発行所 古志社 (<http://www.koshisha.com/>)  
印刷所 しまや出版

©2016 KOSHI SEINENBU